氏　　名　前木由紀（まえき ゆき）
学位(専攻分野)　博　士（人間・環境学）
学位記番号　人博第379号
学位授与の日付　平成19年11月26日
学位授与の要件　学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻　人間・環境学研究科文化・地域環境学専攻
学位論文題目　北イタリア人文主義におけるイメージとテクスト
『ポリフィロの愛の戦いの夢』を中心に

論文調査委員　（主査）教授 岡田温司　教授 篠原資明　教授 鈴木雅之

論文内容の要旨

本論文は，1499年にヴェネツィアのアルドゥス書肆から出版された挿絵入りの奇書『ポリフィロの愛の戦いの夢』（原題『ヒュプネロトマキア・ポリフィリ』）を，テクストとイメージの関係性という観点から考察するものである。主人公ポリフィロが夢のなかで愛人ポリアを求めてさまよいつつ，古代風のさまざまなモニュメントや遺跡に出合うという構成を持つこの本の特異性は，そこで使用された言語と，そこに添えられた豊富な挿絵という二点にある。言語という点では，イタリア語とギリシア語とラテン語の独特の混成が単語と構文の二つのレヴェルで起こっていること，挿絵という点では，ルネサンスにおける創造的でかつ空想的な古代風イメージが豊かに投影されているという意味で，この本はきわめて特異な位置を占めるのである。

本論文は全三章からなっている。すなわち，第1章「テクストとイメージ『ヒュプネロトマキア』研究史」，第2章「挿絵入りの書物，そのコンテクスト」，第3章「「古代風」凱旋行列にみるテクストとイメージ」である。

第1章ではまず，この奇書中の奇書についての研究史がたどられる。さらに，その作者とされる「フランチェスコ・コロンナ」なる謎めいた人物（他の作品は何も知られておらず，伝記的資料も欠いている）について，これまでの多くの研究成果を批判的に検討することで，北イタリアにおける人文主義とその古代研究という文脈のなかに，この人物が位置づけられる。とりわけ，古代ローマ建築にたいする詳細だが，やや空想的な知識の数々が，この作者像の大きな特徴となっている。挿絵の作者に関しても，これまで多くの説が提出されてきたが，そのなかでも，パドヴァの写本装飾画家ベネデット・ボルドン（ないしはそれに近い画家）の可能性が高いことが，様式分析と資料の解読によってあらためて確認される。しかも，作者と挿絵画家とが，綿密な構想のもと，一種の共作関係にあったことが明らかにされる。

第2章では，この書物が当時の出版文化，さらには美術史と文学史においていかに特異な位置を占めるものであるかが，この本の体裁（二つ折版），活字（古代風のローマン体），レイアウト（挿絵と呼応するような文字のレイアウトなど）といった観点から具体的に分析される。くわえて，こうした本を出版したヴェネツィアの名高い出版社アルドゥスについても，当時の他のイタリアおよびヨーロッパの出版杜との比較などから，その独自性および人文主義との密接な結びつきが指摘される。さらに，こうした難解で高価な本が，当時いかなる読者にどのように受け入れられていたかについても，仮説的に考察されている。本書は，16世紀にむしろフランスにおいて成功を収めるが（フランソワ・ラブレーも愛読していた），これらフランス語版と比較することで明らかになるのは，難解で空想的，視覚的で断片的であるからこそ，むしろさまざまな読み方を引き出し，自由な解釈や引用をもたらしたという可能性である。

第3章では，具体的に，本書のもっとも主要なモチーフとなっている，古代風の凱旋行列のイメージが考察される。本書は，『薔薇物語』（ジャン・ド・マン），『アモローザ・ヴィジョーネ』（ボッカッチョ），『凱旋』（ペトラルカ）など中世の愛の文学の伝統上に位置づけられるが，こうした「中世的」伝統と，ルネサンス人文主義文化の「古代風」の要素とが，本書においていかに結びついているかが，この章の主要な論点である。この考察から明らかとなるのは，本書が，ペトラルカの

『凱旋』のテーマを下敷きにしつつも，その道徳的で教訓的，宗教的な意図を換骨奪胎して剥ぎとり，官能的で肉体的，異教的な愛のイメージへと変貌させているということである。このことは，アモルの凱旋行列に伴う，エロティックな古代風イメージの「エクフラシス」――視覚的なイメージを言葉に置き換える修辞――の分析から明らかになる。具体的には，プリアポスの祭壇，白鳥と交わるレダ，ヘルマ柱像など，性の豊穣さを称えるイメージの「エクフラシス」である。

以上の考察から，ルネサンス文化が生み出したきわめて特異な出版物が，その言語と視覚的イメージを通じて，まったく新しい「古代風世界」を創造しえていることが明らかとなる。その想像力豊かな古代風イメージは，バロックや古典主義の時代にも影響を与えることになる。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は，1499年にヴェネツィアのアルドゥス書肆から出版された，イタリア・ルネサンスを代表する挿絵入りの貴書にして奇書，フランチェスコ・コロンナの『ポリフィロの愛の戦いの夢』（原題は『ヒュプネロトマキア・ポリフィリ』）の特異性を，テクストとイメージ，言葉と挿絵の関係性という観点から明らかにしようとするものである。このテクストは，歴史的にきわめて重要で名高いものであるにもかかわらず，イタリア語とラテン語とギリシア語を混成したような単語や構文が随所に使われているところから，難解にして晦渋なものとして，特にわが国ではほとんど学問的に研究されることはなかった。そのテクストに果敢に挑んだ論文として，本研究は高く評価される。

本論文は三つの章，すなわち，第１章「テクストとイメージ『ヒュプネロトマキア』研究史」，第２章「挿絵入りの書物，そのコンテクスト」，第３章「「古代風」凱旋行列にみるテクストとイメージ」からなるが，この構成は，テーマの性格から判断してきわめて的確である。第１章では主に，研究史，作者の同定，挿絵画家の同定について考察される。第２章では，書物の具体的な体裁，ヨーロッパを代表するアルドゥス書葎の出版活動，北イタリアの人文主義の思想的・文化的背景，さらにこの本の受容史について，具体的に説明される。第３章では，この本の主要なモチーフになっている，凱旋行列のイメージとその言語化のプロセスが分析，解釈される。こうした考察を通じて，本書が，『薔薇物語』など中世の愛の文学の伝統的な系譜に属しながらも，その教訓的で道徳的な枠組みを超えて，まったく新しい「古代風」のイメージを創造している点が明らかにされる。この結論に至る論証は，実証的かつ独創的なもので，高い評価に値する。

たとえば，「古代風」を盛り上げているのは，論者によれば，テクストが持つ次の三つの特徴である。すなわち，ひとつは，イタリア語とラテン語とギリシア語の独自の混成語の使用である。こうした混成語を，主に動詞や形容詞に用いることで，まず言語のレベルにおいて，失われた古代の雰囲気を読者に喚起させようとする。

次に，古代風の建築モニュメントや廃虚，彫刻，墓碑，山車，ヒエログリフ，銘文などをテクストのいたるところに登場させ，それらを事細かく記述していく「エクフラシス」の手法が挙げられる。それらの記述は，実際にルネサンスで目にすることのできた古代ローマの考古学的な遺品を踏まえつつも，それらをさらに空想的で夢想的に膨らませたもので，その点で，とりわけ北イタリアの人文主義の精神的風土を反映している，と解釈する。また，凱旋行列の描写などに見られるその記述は，しばしば，きわめてエロティックで異教的な性格を伴っているが，その点にもテクストの大きな特徴があることが，説得的に説明されている。

三番目に，これら主人公が夢の中で見たものが，実際にテクストにおいて挿絵で挿入され，「古代風」のイメージを高めている点が挙げられる。たとえば建築物の挿絵と，それを言葉で記述するテクストのあいだには，密接なつながりがあること，作者が古代建築とその復興としてのルネサンス建築に精通していたことも，論者は具体的に実証している。さらに，古代風の印象をいっそう高めるローマン体の活字が，独特な形でレイアウトされ，挿絵と有機的な連関を持つことも指摘されている。

この難解なテクストとその歴史的背景を，このようなかたちで実証的かつ詳細に分析，検討した研究は，少なくともわが国ではこれまで皆無であった。今後の発展が期待されるとすれば，まず，混成語の構造と使用法に関して，もっと網羅的に調べる必要がある点，さらに，建築，墓碑，オベリスク，神話，ヒエログリフ，エンブレムなど，テクストに登場する豊富なイメージとその断片についても，それらをすべてリストアップして分類整理する必要がある点である，論者は，さらに研究を発展させうる能力を充分に備えている。本論文で最も高く評価されるのは，出版史，美術史，文学史，文化史といった

従来の学問の枠組みを超えて，イタリア・ルネサンスが生んだ極めて重要な書物を幅広い視野から解明しようとした点にある。その意味で，人間・環境学研究科の博士論文として価値あるものと判断される。平成19年 9 月20日，論文内容とそれに関連した口頭試問を行なった結果，合格と認めた。